

私たちの “とっておき”

外食はいつもここ。 家族でくつろげる イタリアンレストラン

「食いしん坊のわが家はみんな、お料理やワインが豊富にそろったこの店がお気に入り。100種類以上のメニューがあり、中でも仔羊のグリルはやわらかくてジューシー。ディナーはいつもフルコースと決めていて、ワインを味わいながらゆっくりと楽しめます。シェフはニューヨークでも通用するほどの腕前じゃないかな。わが家のホームパーティーに呼んで、キッチンをお任せしたいくらいです(笑)」(ウィリアムさん)

エッセ
浜松市東区中郡町1987-2 TEL.053-435-0577
ランチ11:30~14:30 ディナー18:00~21:00 (土日祝は17:30から)
火曜定休 駐車場18台



オーナーシェフの
竹内一文さん



仔羊のグリル(2,100円)
とフォカッチャ

長い浜松暮らしの間に大勢の友人がで、連れ立って出かける店も増えた。世界各国を見てきたアントン夫妻がグローバルな視点で選んだお気に入り。美枝さんのチョイスも含めて紹介する。



大きさも形もまちまちな種つぼ。花瓶としても使える

さまざまな民芸品が所狭しと並び店内。美術品ではなく生活用品にこだわる

掘り出し物が潜む古民芸店

「かつては朝市も営んでいた古民芸のお店で、屋号入りの銭箱や手水鉢のほか、昔は種の保存に用い、今では茶の湯の水指に転用されている種つぼなど、珍しいものがいっぱい。日本の生活文化を肌で感じることができ、見ているだけでも飽きません。私はここで買った文箱を書道の道具入れに使っています。娘の友達を案内したら、大いに感動していましたよ」(カレンさん)

阿多古路 三の市
浜松市天竜区西藤平296-1-2
TEL.053-928-0016 (担当:秋田浩子さん)
9:00~17:00 第3水曜定休 駐車場3台

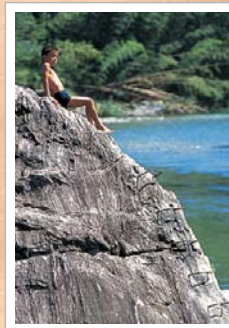
清流で知られる阿多古川 美しい風景は地域の宝

「“平成の名水百選”に選定された阿多古川。水深数mまで肉眼で見える透明度の高さや、緑に彩られた清らかな滝の景色が大好きです。阿多古川流域の懐山地区で生まれた私には特になじみ深い存在。今でも夏に帰省した時にはこの川で泳ぎます。いつまでもきれいな阿多古川であってほしいものですね」(美枝さん)

阿多古川
天竜川水系の一級河川。延長22.6km。県道9号(天竜東栄線)に沿って流れ、天竜区渡ヶ島で天竜川に合流。サワガニ、カワゲラ、ヒラタカゲウなど清流にしか生きられない水棲生物のすみかになっている。



全国でも希少な清流。きれいな川は地域住民のボランティアによって守られている



地元の子どもの遊び場、飛び込み岩



アントン夫妻

夫婦ともにニューヨーク生まれ。1975年より日本在住。夫のウィリアムさんは浜松学院大学現代コミュニケーション学部教授。静岡文化芸術大学の非常勤講師も務める。妻のカレンさんは首都圏の金融関連会社を中心に多国籍企業のコンサルタントとして活躍。

暮らしデータ

在住歴	33年
家族構成	夫婦二人暮らし。現在、長女(39歳)と三女(25歳)はニューヨークで、二女は東京、長男は沖縄で暮らす
住居	高台に建つ60坪の一戸建て。ウィリアムさんは週4日、浜松市中心部にある大学へマイカー通勤し、カレンさんは東京と浜松を行き来する生活。互いに仕事を持つため、夫婦そろって自宅で過ごす時間を大切にしている



日本の田舎に憧れて移住した、アントン夫妻。壁に飾られた「蓮花之君子者也」(蓮は花の君子なる者なり)の書はカレンさんの力作

特集2 美しい自然と人の温もりに包まれた暮らし スローライフに憧れて

PART 1

真の豊かさを実感

豊かな自然が身近にあり、温暖で過ごしやすい浜松。この街を永住の地と決め、移り住んだ2組の家族にインタビュー。スローライフの魅力を語ってもらった。



カレンさんの硯。書道二段の腕前

大き過ぎず小さ過ぎずのんびり暮らせる街

遠く太平洋を望むデッキにて美枝さん、眞理雄さんと。子どもたちはこの空の下でのびのびと育った



「全国を巡り歩き、都市の利便性と自然が共存する浜松が気に入りました。人もみんな明るくて親切。開放感が浜松の魅力ですね」と語る夫のウィリアムさん(65歳)。

住まいの隣はちょっとした森になっていて窓際に小鳥や小動物が訪れる。壁に飾られた書は妻のカレンさん(63歳)の作品。大きな硯で墨をすり、背筋を伸ばして筆を運ぶ。「日本料理は何でも得意」とほほ笑むカレンさんは、梅干しも自分で漬けるそう。この日、帰省していた二女の美枝さん(30歳)と長男の眞理雄さん(27歳)は「浜松が私たちの故郷」と遠州弁で声をそろえた。

ニューヨークを旅立ってから30年以上の時が流れ、日本も様変わりした。だが、ここにはまだ美しい自然と温かい暮らしがある。日本人以上に日本を愛するアントン夫妻の豊かな日々は続く。